



(エベレストより望見したマカルー)

秀峰マカルーを目指して(上)

大西 宏

去年エベレストから間近かに眺めたマカルーは我々を魅了した。威風堂々とし、地球のしんとつながっているような岩肌は造山運動の激しさを如実に物語っているようで、登山が終了した後も心象風景としていつまでも脳裡に焼きついてた。エベレストから見るマカルー、巨大に隆起し、胸が透くような確かきで清澄な空気を背に聳立している。私はこの山には永劫という言葉がふさわしいと思った。

そんなマカルーに今春出かけることになった。高山研究所の事務局で孤軍奮闘しようやく出発にこぎつけた。先発の重責を持って春まだ浅いカト

マンズへやってきた。前年ネパールヒマラヤ初見参のときに比べて戸惑いは少なく、カトマンズでの準備は円滑に運んだ。とりわけ旧知のコスモトレック従業員は懇切丁寧に甲斐甲斐しく世話を焼いてくれた。おかげで、二週間ほどで山積した手続きを終え準備万端ととのった。

カトマンズ入り二日目にサーダーのラクパ・テンジンと会うことができ、海千山千の彼は私のような若輩者の要求を柔和な表情で聞き事情を理解してくれた。隊長の原さんとは一九七〇年のマカルー南東稜以来旧知の仲であるのでヒマラヤンジャーニーと専属契約している彼がコスモトレックの隊に随行してくれることに關して快諾を得た。

九日にワндаとエバがカトマンズにやってきて、やれ出発を早めろだの、トランシーパーを二台余計に持ってきた

足りないと言いつつボーランド人達。しかも、彼女達は日本で金策や集荷に奔走した私達に敬意を払おうともしない。しかも、彼女達には人の話を素直に聞いたり、思いやったりといった姿勢が著しく欠如していた。ただでさえ鳥合の衆である登山隊は有機的な結束はみじんもなく、シェルパ達もボーランド人には懷疑的で能動的に協力しようとしなかった。

私はそんなパートナーの前で正気でいられそうになく、腐心した。彼女らは全く言行不一致で一見百戦練磨のように見えるが気の利いたことを言っているようでいながら活動の障害になることばかりをした。ついに全然前に出てラッセルしたり、隊の荷物を歩荷したりというようなことはしなかった。連帯意識の萌芽となるであろう共に汗を流し研鑽しあうといった姿勢は皆無



1990年(平成二年)

8月号(No. 542)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 秀峰マカルーを目指して(上)……………大西 宏…(1)
海外の山……………(2)
『ゲルの暮らし』
追悼・佐伯富男君の死……………藤平正夫…(3)
「日本の山岳標高」
第二次中間報告について……………(3)
海外登山基金の交付について・
登山計画募集……………(5)
東西南北……………(5)
「2,500 メートル以上の山」
「武甲山 300 回挑戦中」ほか
図書紹介……………(9)
「中国・日本・ネパール 1988 年
チョモランマ/サガルマタ友好
登山隊報告書」ほか
自然保護随想……………(13)
報告……………(11)
「第3回山岳図書を語る夕べ」ほか
会務報告……………(14)
六月理事会、ルーム日誌、会員
異動、タンボチェ僧院再建協力
者ご芳名、新入・復活会員、住
所・住居表示変更
フィルム委員会保管リスト
(追加分)……………(15)
お知らせ……………(16)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテラフ電話

234 六六五九

であった。

逆にシエルパ達との作業はカトマンズでの備品回収に始まって一貫して以心伝心で、彼らとの活動には歌があり、シエルパたちとの間で私のマカルーに対する気持ちは涵養されていった。今遠征では彼らと共に歩き時には身の下相談までして培った友情がひとときは光彩を放って反芻される。

カトマンズで望見される端正な連嶺も雪が多い模様で「とにかく来てしまったのだから最善を尽すしかない。」という原さんの言葉に励まされ、奮闘努力の日々が続くことになる。今回は、各種雑役に東奔西走していたこともあいまって絶対登らなければといった気負いは感じられなかった。

カトマンズでの生活も慌しく過ぎ去り、ラニ・ポカリ近くのバスターミナルからキャラバン^①の起点となるヒレヘ向けて出発した。大津さんの奥さんが走ってきて「宏くん頑張つてー」と手を振った。以後、キャラバンを含めて老かいなテンジンの臨機応変な手腕で隊の活動は順風満帆に進行してゆく。しかし、亜熱帯の大河を溯行するキャラバンは草いきれと逃げ水の河原や瀾葉樹の生い茂る丘陵地帯をうんざりする程歩かなければならず少なからず閉口した。

最奥の村タシガオンは石積みパス

海外の山

ゲルの暮らし

四月末から七月末まで、もう三カ月間、ゲルの暮らしをしている。中国語では包(パオ)と呼ぶ、モンゴルのフェルト製テントのことだ。大阪の国立民族学博物館にも展示されているのでご存知の方も多いと思うが、朝目ざめて美しい、と思うのは天井部分を放射状に支える八十一本の棒(オニという)の朱色である。モンゴル遊牧民は、四季それぞれ草原での厳しい仕事を終えて、この朱色に心をなごませるのかもしれない、などと思う。

通常三台のベッドがゲルの中に置かれている。子供が多い家庭では、円型の木の床にマットを敷きつめ、そこでも寝る。南向きの入口に近い方にストーブ、奥の方に低いテーブルが一基、アロー^②と呼ばれる硬質チーズ、ビヤラクと呼ばれる軟質チーズなどを山盛りにした皿が必ず置かれている。子家畜を育てる夏場、牧民たちはあまり肉を食べない。馬乳を発酵させたアイラグ(馬乳酒)と、これらチーズ類が主食となる。

家族にとつての貴重品は、奥の木箱におさめられている。若い頃軍隊にいた時の写真、夏祭り、ナードムでの競馬で入賞した時の写真、都市にいる長女のポートレートなどをおさめた額が、ほぼ百%と言っていいほど、その上に飾られている。写真は、ゲルの暮らしの歴史を語る唯一のものである。

客は、予告なくふらりと来る。先客がいようと構わない。自己紹介するでもなく、出されたスーティー茶、つま

リミルクと塩を少量を足して煮出したお茶をすすする。その後はアイラグ、そしてミルク(牛が多いが、羊のもラクダのものもある)を蒸留して作ったシミンアルヒ(「滋養ウオッカ」の意味だが、滋養どころか飲み過ぎたら足に^③来る)の順で、草原産のアルコールをすすめられることになる。

雨や雹^④が降ると天井の、円型の天窓部分をあわててロープを引っぱって閉める。一瞬、ゲルの中は真っ暗になるが、ドアのところからもれてくる明かりの中で、激しくフェルト地に叩きつける雨音を聞いているのは悪くない。私の住むゲルは、五つの壁(ハン)で組み立てたごく標準的な大きさのもので、広さは二十五平方^⑤。買えば十五万円ぐらいいらうか。十年は使えるから、日本の恐い住宅事情を思い出すと、是非とも「若者、新婚向き」住宅として売り出したい気もするが、わが島国は湿度が高いので多分長持ちはしないかもしれない。

足は何と言っても馬である。ちよつと隣のゲルに行くにも馬を使う。そして、どんなモンゴル人でも馬に乗せた途端、見事に決まるのは、不思議なほどだ。

七月十一日から三日間、私のいるムンゲンモリット(「銀の馬」の意味)という村のナードムに参加させてもらった。圧巻は、馬齢別に六種行われる競馬である。何しろ、五、六歳の坊ややお嬢ちゃんが三十^⑥の長丁場を疾駆するのだ。個としての人間の力の差(私たち日本人との)を見せつけられる気がするの、そんな時である。ヘンティ^⑦・ハーンという二三六一の信仰の山に登った時、あとからモンゴルの仲間二人が頂上まで馬でやって来たのには拍子抜けしてしまった。モンゴルでは登山も馬がやるのである。(モンゴル高原で、江本嘉伸)

海外の山

ティーがあり、コンマ・ラの荒天のためこの風光の良い村に一週間近く滞在する破目になった。村内を右往左往して、トンパをご相伴にあずかったり、談笑したりしているうちに出発日となった。

雪が深くラッセルには苦心することになる。ポーター達は我慢強く、二人のシエルパニとはくに仲良しになり帰路カトマンズまで連れていった。核心部のコンマ・ラ(四一二〇)越え

追悼

佐伯富男君の死

藤 平 正 夫

佐伯富男(通称トンコ)君が急逝した。六月十一日の夜のことである。会合で八時すぎ帰宅したら家内が蒼い顔で急死を告げた。すぐ病院へ電話をいれて担当医師の説明をきいた。死去は午後七時二十二分とのことであった。遺体を芦峠へ運ぶ車がきていたので、今からでは遺体を見るのは無理であった。

彼が旧制富山高校尋常科一年のときからのつきあいである。当時私は高等科一年生であった。どういふきかけだったか、はつきり想いだせないが、五十年に及ぶ友人であった。

ではシエルパニ達も三〇*の負荷を平然と担ぎ、夜は吹雪の中岩洞で毛布にくるまって寝ていた。しめった薪にマツチ一本で着火する技術には舌をまいてしまう。食事もマツカイと呼ばれるポツプコーンとツアンパとを煮たトウクパだけというつましだ。「マツカイ・カヌ(マツカイを食べなさい)」と言ひポケットから一握りの豆をとり出してくれた。それでも不屈に五三〇〇のフレンチ・ベースキャンプへ隊

いろんな想い出がかけめぐり、夜の闇のなかを芦峠へむかう彼のなきがらに、つきそってやれなかった自分を責めた。

山の自然児そのものの一生を過ごし、最近では芦峠の部落代表となり、部落の活性化に懸命の努力を重ねていた彼は、さぞかし心残りだったであらう。

齒に衣きせず正論を直言する彼は、その人柄の良さとひたむきな純粋さが、ほとぼりして、憎まれ口をたたかれた相手にすら好感をあたえた。

十二日の通夜は芦峠の公民館で神式で挙行された。「佐伯富男大人神(うしのみこと)」は、立山の神々のもとにかえっていったのである。

荷を背負い上げ集積された。しかし、賃金はタシガオンからB・Cまで一人/三〇〇ルビーと破格の高値となっている。秋になって雪が消失すると六〇〇ルビーになるらしい。

四月十一日からいよいよ登山開始となり、C1の荷上げにはラクパ・テンジンも昔とったきねづかを發揮して加わり、ポーランド人とは一線を画した行動型態をとった。彼女らには装備を提供し、随意にやつてもらうしか方途がなかった。マカルー・ラ直下のク

ローアール(比高五〇〇)には私とシエルパとでロープを固定した。主としてニマ・ドルジェと私が一緒に行動する機会が多かったが、ニマはさすがに三国隊の北側六名しか選抜されない正規メンバー(登頂資格のある)だけあって他を凌駕して強かった。BCまでの往路、彼は昨年カンドバリでしよ

うけつをきわめた子供の時にかかる高熱を発する病氣にかかり、ヒラリーBCで寝込んでしまい前途多難を思わせたが、よみがえってついには栄冠をかちえた。

は雪も多かったが、全天候に近い形で行動することができた。登るにしたがつてエベレストやチベットの峡谷、チャムランなどの山々が圧巻で、登山中は登ることに躍起になり、「さあアラムガロネ(休もう)」と言ひ岬々たる山並を見ているときには忘我があつた。

マカルー・ラへのクロアールは島状のインゼル脇にある急峻なルンゼなど井戸底からはい上る気分であるが、左右の「のど」を形成している岩壁から強固な支点をとり、間断なく風の吹くマカルー・ラへと登る。―続く―

「日本の山岳標高」

第二次中間報告について

「日本の山岳標高」

小委員会

昨一九八九年六月三日に「日本の山岳標高」の第一回目の公表が行われ、その内容は『山』五三〇号に紹介した。二年目の今回は標高で区別せずに、さまざまな意味で重要な山を全国的に調査し前回の調査結果(一八九山)と合せた六二四山の標高の調査結果が公表された。作業上の問題で今回のリストに抜けている七時雨山、乾徳山など二十六の山も次年度には取上げられ、さらに数を増やして最終的なまとめが行

表 1 標高の変更した山岳の一覧

番号	山 名	従来値	測定値	測定点の位置
24	石 狩 岳	・ 1966	1967	・ の南方 0.25 km
39	利 尻 山	△1719	1721	△の南方 0.2 km
46	無 意 根 山	△1460	1464	△の北方 0.25 km
49	樽 前 山	・ 1038	1041	・ の東方 0.1 km
52	目 国 内 岳	C1210	1220	
54	羊 蹄 山	△1893	1898	△の南方 0.15 km
57	遊 楽 部 岳	△1276	1277	△の西方 0.5 km
87	鳥 帽 子 岳	C1470	1475	
78	五 葉 山	C1350	1351	
114	月 山	△1979	1984	△の南方 0.03 km
125	靈 山	C 810	825	
132	那 須 岳	△1898	1915	茶臼岳 △の西方 0.1 km
135	女 峰 山	C2480	2483	
139	袈 裟 丸 山	C1960	1961	
143	荒 海 山	△1580	1581	太郎岳 △の西方 0.1 km
169	岩 菅 山	C2340	2341	裏岩菅山
170	白 根 山	C2170	2171	本白根山
171	四 阿 山	△2333	2354	△の西方 0.15 km
195	清 澄 山	C 370	377	妙見山
211	三 原 山	・ 758	764	
221	弥 彦 山	C 630	634	
227	妙 高 山	△2446	2454	△の南方 0.15 km
299	秋 葉 山	C 870	885	
301	七 面 山	C1985	1989	
305	鳳 来 寺 山	△ 684	695	△の北方 0.1 km
324	恵 那 山	△2190	2191	△の北西方 0.5 km
409	御 嶽 山	△3063	3067	△の南西方 0.25 km
412	白 木 峰	・ 1592	1596	・ の北東方 0.15 km
417	宝 立 山	C 470	471	
418	石 動 山	C 550	564	
441	御 在 所 山	△1210	1212	△の西方 0.1 km
444	笠 取 山	C 840	842	
448	愛 宕 山	C 920	924	
454	信 貴 山	C 430	437	
455	二 上 山	C 510	517	雄岳
456	金 剛 山	C1120	1125	
490	摩 耶 山	C 700	702	
500	蒜 山	△1200	1202	△の東南方 0.2 km
504	道 後 山	△1269	1271	△の西方 0.3 km
526	朝 日 山	△ 342	344	△の西方 0.4 km
619	与 那 覇 岳	△ 498	503	△の東北方 0.1 km

注 1) 記号△は三角点を, ・は標高点を, Cは等高線をそれぞれ意味する。

2) 「位置」欄には、測定点の位置を示す。

3) 「番号」欄は、「山岳標高」の表に記載されている番号を示す。

(兎玉 茂)



費四〇〇円と送料二一〇円を郵送すれば送ってもらえる。

またこの件につきましては、先般各支部から当該地の主要山岳についてご教示いただきまして、感謝いたします。

われることになっている。

日本全国に山はどの位あるのか？想像を越えるくらい多いと思えるが、一応誰もが納得させられる「取上げるべき山」は案外数えきれぬ数しかない。

全国を全体的に見通せる程度の大きさの地図として国土地理院の五十万分の一地方図を例にすれば、ここに記載されている山は全部で一千山をあまり越えない程である。『山日記』の「日本の山一六〇〇以上の山」ではコブを含めて千山以上を載せている例もあるが、したがって今回のリストに取上げ

られた山は各地方で著名な山がほぼ含まれていると思われる。

今回の調査の結果、標高が変った（すべて高くなった）山は表1の通りであるが、主な山としては利尻山が一七一九から一七二一に、羊蹄山が一八九三から一八九八と三角点とは異なる真の頂上の標高が示された。本州では那須岳（茶臼岳）が十七、四阿山は二十一、標高が高くなったのが注目される。また前回公表した数値のうち御嶽山は三〇六三から三〇六七に現地計測の結果訂正された。

今回のリストの特徴のいくつかをあげれば次のようになろう。

①北から山域別に並べられていて確認が容易になっている。ただし「山域名」については、全国的となればここに表示された山域名が定着しているわけではなく、今後検討の余地を残している。②前回のリストでは「山名」と「山頂名」とは区別して、それぞれに標高を与えたため二五〇〇以上の山だけでも総数は二二七山となったが、今回は、例えば立山のうち最高峰の大汝山（三〇一五㍎）のみを立山（山名）

として扱い、山頂名である雄山、富士ノ折立はリストに入れられていない。

この伝で前穂高岳（山名）の範疇にあった明神岳（山頂名、同じく唐松岳の範疇の不帰嶮は今回のリストから抜けてしまった。ここである山の範囲、山名、山頂名という区分の仕方はまだ十分に検討の余地を残しており、最終的なまとめの段階で再検討の対象となるものと思われる。

なおこのリストの入手は、（財）日本地図センター（〒153東京都目黒区青葉台4-9-16）へその旨を書いて、実

海外登山基金の

交付について

中国・日本・ネパール三国友好登山の終了後、各方面の大変な努力によって残された七千万円の剰余金を「海外登山基金」として今後のヒマラヤを中心とした海外登山の助成を行なうことになった。

平成二年度については三百万円を補助金支出(基本的には運用益を毎年の補助金に充当し剰余金が発生した場合には基金組み入れをする)とし、会報に告示、五月二日までに申請書を提出のあった四隊について、五月十一日、日本山岳会ルームにおいて、海外登山基金委員十二名のうち海外出張中の二名を除いた十名で審査が行なわれた。

その結果、(社)日本山岳会東海支部「東海支部創立三十周年記念事業、日中友好天山山脈雪蓮峰登山隊一九九〇」の天山山脈雪蓮峰主峰の初登頂に一五〇万円、(社)日本山岳会、高所登山委員会、青年部共催の「日本山岳会第一次パミール登山隊一九九〇」のコミュニティ・ニズム峰、コルジュネスカヤ峰の登頂に一〇〇万円の助成が決定された。

なおその他の二隊、横浜市立大学天山路査の会、横浜市立大学托木木峰登山隊のトムール峰北東稜登頂と(社)日

本山岳会東海支部「東海支部創立三十周年記念事業、インドヒマラヤ学術登山隊一九九〇」については助成が見送られ、五月十七日の理事会に報告、承認を受けて五月二十六日の総会にて発表された。

助成団体については、報告書、スライドセット、会計報告および会報への原稿提出が義務づけられている。

「海外登山基金」は、広く海外登山の振興のために、意欲的な登山を行なおうとする個人、団体の計画実行の一助となるべく助成を行なうもので、平成二年度については募集時期が遅れたこともあって、多くの応募を受けるまでに到らなかったが、次回以降については、時期を早める検討をしており、年末に締切り、二月の理事会にかけ承認、補助金交付したいと考えている。基金の趣旨に沿った海外登山の計画と応募を待つ次第である。

海外登山基金委員会

◆国際シンポジウムのお知らせ

花と緑の国際シンポジウム(大阪市、大阪市大、大阪市大日中友好学術登山隊主催)は「ヒマラヤの南と北―自然と生活」のテーマで、九月六、七の両日、大阪国際交流センターで、一般に



二五〇〇メートル以上の山

南川 金一

わが国の二五〇〇メートル以上の山二四三山を、この六月で登り終えることができた。

二五〇〇メートル以上の山を幾つあると見るのか、それは論議のあるところである。本会報五三〇号(八九年八月)で児玉茂氏が紹介しているように、国土地理院は二万五千分の一地形図(以下二・五万図と略す)上に山名表記のあっても五万図と略す)上に山名表記のあつて二五〇〇メートル以上のピーク二二七について標高等を整理し、「日本の山岳標

も公開して開かれる。

花博を記念し、中国、ネパール、タイ、日本の研究家参加し、ヒマラヤ地域の自然保護を考えようというもの。お問合せは、広谷光一郎迄

TEL (電) 03-341-5451

(夜) 03-369-4073

高」として発表した。また、同氏が記しているように、これまでその種のものとしては本会の『山日記』があり、一六〇〇メートル以上の山が標高順に整理されている。「日本の山と三百名山」を掲載した最後の『山日記』である'88年版には、二五〇〇メートル以上のピークが二二三あがられている。因みに、両者に共通して登場する二五〇〇メートル以上の山の数は二〇七である。

その両者の数字の相違は、国土地理院のものは二・五万図で整理されており、当然のことながら昨年時点で最新のものが使用されているのに対して、『山日記』は五万図をもとにしており、調査時点の五万図には山名の表記がなく、その後表記されるようになった山が幾つかあることによる。さらにもう一つは、『山日記』では、五万図上に表記がなくても、一般に呼称のあるピークについても取り上げていることである。

さて、二五〇〇メートル以上のピーク数であるが、国土地理院が整理した、二・五万図に山名のある二二七については一応異議はないものとして、それ以外に『山日記』のみに登場するピークが一六ある。それをあげると、天狗の頭、小窓王、北燕岳、屏風の頭(以上北アルプス)、高天ヶ原(乗鞍岳)、濁沢岳(中央アルプス)、北俣岳、白河内岳、

西小石岳、摩利支天、前小河内岳、小兎岳、井戸沢の頭、生木割、偃松尾、不動岩（以上南アルプス）である。この中には前記のように地図上に山名が表記されていない山もある。地図上に山名がないから山でないとはいえない。かといって「山の資格」についても、までも究明することは筆者の手に余るので、そこまでは踏み込まず、二二七に一六を加えた二四三を、二五〇以上の山の数とした次第である。

なぜ二五〇以上の山にこだわるようになったのかといえば、特別の理由はないが、登った山を『山日記』でチェックしていったところ、数年前の時点で、まだ登っていない二五〇以上の山の山が三〇程度であることに気がついた。そのすべてに登ることができるといえるかは判らないが、登れるだけ登ってみるのも面白いと思った。

ところが、残りが二〇くらいまでは良かったが、それ以降になると、主脈から外れた位置にある山が多く、道はもろろん、情報もなく、地図上でルートを決め現地で見極めを判断して取り付くという場合が多くなった。南アルプスの小日影山、黒松山、大唐松山等は

いずれもそのようにして末端から登ったもので、南ア特有の鬱蒼たる森林の中の急登に次ぐ急登が印象に残る。ガスでルート判断がつかない、準備した赤布が足りなくなった、当初の予測よりも大幅に時間が経過してしまっただ、等により退却したことも何度かある。うるさい森林の下草やヤブを避けるために、主に残雪期から梅雨入りまでの間を狙った。

今年に入って残るは四山であった。春の連休は北アルプスの硫黄岳へ向かった。湯俣に幕営、四〇と二〇の補助ザイルを持参して硫黄岳の末端から硫黄岳を往復した。技術的に最も難しいと思われた硫黄岳を終ったことで、ゴールがぐっと近づいた感じであった。連休一週間後の週末、新穂高温泉から涸沢岳西尾根の蒲田富士を往復、いよいよ残るは双六南峰と緑の笠の二つとなった。

しかし、心に引っかかるものがあつたのは、南アルプスの大唐松山である。農鳥岳から奈良田へ落ちる尾根上のこの山は、三角点の標高が二五五四・八である。二年前の六月、奈良田から尾根伝いに十三時間半かけて三角点ピークを往復した。ところが、その一年後に発表された国土地理院の「日本の山岳標高」では最高地点が二五六一とある。三角点の西にあるピークがそれらしい。見たところ三角点ピークよりも高いとは思えなかったもので、そこまでは踏みに行かなかったのである。登頂という行為は文字どおり頂に登ることであるから、そのままに済ますことはできない。六月の最初の週末、再度奈良田から挑戦した。この時は本会の中村昭会員が同行してくれたが、顧みると、この二〇年程の二五〇以上の山はすべて単独である。

最後の二つは梅雨の合間を狙った。六月中旬、小池新道から双六小屋へ入り双六南峰を踏んで、翌日、快晴の稜線を笠ヶ岳へ向った。播磨平の片隅に小さく盛り上がる緑の笠は、最後としてはやや物足りなさを感じないではなかったが、稜線からの下降地点に着いてみると、数分の高さで垂直の雪の壁になっており、その下は雪の急傾面である。アイゼンを持って来なかったのが悔まれた。しかしピッケルを振るってステップを切り何とか乗り切ることができた。その緊張感と、梅雨時とは思えない澄んだ青空がフィナーレを一層盛り上げてくれた。

今年もさよばいりで会いましょう

武甲山三〇〇回挑戦中

松本 壽一

西武秩父線が秩父市に入る左窓に映る荒廃した武甲山（一二九五・四四）
 当時は一三三六・一、を眺めながら横瀬で降り表参道をテクる日課が、今日も始まるうとしていた。

昭和四十四年四月、第一回の登頂を果してより二十年の歳月が流れていた。その時は山伏峠より武川岳へ続く尾根を登り、山吹の花や山ツツジの花が咲く長い尾根を妻坂峠へ出て、大持山、小持山を越えシラジクボから急坂を登り頂上を経て西山道を坂氷へ下った。武甲山には表参道、西山道、小持大持鳥首峠コース、寺跡コース、浦山コース：の外ロングコースとして小持大持―妻坂峠―武川岳―二子山のコースが考えられた。

四十五年になり驚愕すべき情報が入った。このままセメント採掘が続けば武甲山は、五十五年で消去するといふある数理学者の言である、「山がなくなる」このことは私にとって一大センセーションだったのである。私は足繁く前記六コースに通うようになった。とくに二子山へ出る八時間のロングコースには満足していた。四十七年秋、

横瀬の小泉酒造蔵氏が米寿の祝いに武甲山に釣鐘を寄贈する一行と表参道を共に登ったことがあった。この老登山者の執念と気力には大いに与るところがあった。武甲山西山道は北面のため、冬は氷付いた雪が三月下旬まで残りアイスバーンになり絶好のアイゼン練習場となる。股下がスパッと切れて高度感もあり、その延長線上に奥秩父、八ヶ岳、北岳、槍穂高があった。一〇〇回を意識し出したのは七十三回を越えた四十九年頃である。しかし、三年間の関西転勤で帰ったのは五十二年で芦花公園の社宅に入った。私は五十三年中にどうしても一〇〇回にしたかった。しかも冬期だけで。そして西山道を往復すること。

山は何度登っても同じではなかった。その都度新鮮であった。見晴台でアイゼンをつけ頂上往復見晴台でぬぐという繰り返しであったが、冬の山は雨、雪、風、霧とめまぐるしく顔を変えていた。私の方も体調、気持も毎日違っていた。そして四月に九十九回となり十一月五日に最後の一回を登り一〇〇回となった。九年たっていた。

二〇〇回に挑戦し始めたのは五十五年後半である。思い出多い西山道も五十九年に廃止となった。浦山側に道を変えた私は五十四年から平成元年までかかり、残り一〇〇回を達成した。一

〇〇回から十一年、初回から二十年経っていた。終ってみると毎日が日課のような気がした。

さて、三〇〇回の挑戦については「人間やる気になれば何歳になっても遅くはない」との名言を守り気楽にやりたいと思っている。平成二年八月現在で二〇八回登頂。

やはり、出頂の茶屋は

絶頂の茶屋

田畑 真一

山村正光氏の啓発を受け(山村氏「車窓の山旅—中央線から見える」)、「出頂の茶屋は絶頂の茶屋だった」(『山』五三五)と題する拙稿を発表させていただいた。今では人の訪れもない南アルプスの山梨県側前山にあった一茶屋を取り上げたわけであったが、多くの方から書面・電話などで「読んだ」とのお声をいただいた。意外なこと、驚くやら感謝するやらである。これも失われた古いよいものをなつかしむ心情のあらわれ。こう理解してみた。とりわけ小野幸氏からは有益なご示唆をいただいた。小野幸氏の啓発を受け、再度出頂の茶屋に関心をもつものであらう。

結論から言うと、前掲の拙稿で述べ

た内容とも関連する。出頂があった場所、その地形上の意味からしても絶頂の茶屋だったという点である。大正十二年に出た『山の憶ひ出』は、知る人ぞ知る木暮理太郎の名著であるが、これの下巻のなかには「矢川の部落を過ぎ、出頂の茶屋まで高距九百米」とある。昭和三年に出た雑誌『少女の友』第二十一巻のなかには「十二時過ぎには絶頂峠の茶屋へ辿り付いた。茶屋には六十を越した爺さんと婆さんがゐて」とある。古きよき時代の出頂の茶屋である。「出頂の茶屋には絶頂の茶屋がよく似合う」などと強調してみたい。

短歌「登る朝」

大橋 克也

登る朝濡れ残りたるひと隈の幕営の跡に靴締めて立つ

天幕を畳みし跡のみ乾きいる河原に立ちて動く霧見つ

登る朝天幕畳みし一角の白き礫で身ごしらえする

幕営の跡のみ白き礫より黙して発てり霧の嶺目指し

霧の巻く山稜に息を鎮めつつ岐路に立つこと余多ありけり

三国登山隊公式報告書の発行

このたび本会より三国登山隊公式報告書がまとまりましたのでお知らせ致します。

* 発刊日：五月二十五日

* 内容、仕様：報告、学術・科学報告、資料の三部構成でB5版、三百五十頁、頒価五千円

* 編集、発刊：登山隊編集委員会

* 販売取扱：日本山岳会事務局

山田会長、富士山頂より

スキーで滑降

山スキーが大好きな仲間六人で六月十七日(日)朝六時佐藤小屋を出発、ゆつくり、ゆつくり登ること六時間頂上にたつた。昨日前線が通過して風と雨ですごかったがそれがうそのように晴れあがり風も弱い。スキーをかつぎ、兼用靴をザックに入れ軽登山靴で登る。山田会長は昨年モンブランに登ったがそのトレーニングに丁度今頃ここに登り雪の状態をみているという。昨年からこの状態であればなんとかなるのであると思っていたそう。

頂上には十二時から一時までのんびり休む、胸が高鳴る。はたして大丈夫だろうか、一人一人息をひそませなが

ら滑り出す。会長は自分のペースでゆくよといっている。堅実なすべりだ。ひとすべりすると気持ちにゆとりが生まれ大胆に滑れるようになった。あとは全員ニコニコ顔で思い思いのシユプールを描く、広大な斜面は自由に奔放に滑れる。ビデオをとりながら一時間、たっぷり時間をかけて楽しみながら七合目までおり、佐藤小屋に向った。會長この時六十八歳二ヶ月、このメンバーの中にはお孫さん位の歳の人がいた。

参加者 山田二郎、山本良三、大森薫雄、浜口欣一、木村カズミ、中川武雄 (中川 武)

田部重治文学碑の除幕

本会名誉会員田部重治氏のレリーフが既に奥秩父の栃本に(昭和三十八年建立)あることはご存知の通りであるが、これとは別に、このたび、田部先生の代表作といわれる『山と溪谷』に収録されている「笛吹川を溯る」の地元、三富村に、文学碑が作られ、去る五月十七日に、その除幕式が、盛会の裡に行われた。

これは平成元年度における三富村の「自然と健康あふれる笛吹の里づくり」の一環として設立されたもので、碑面には、東沢溪谷の美しさを讃え

た、不朽の名作、「笛吹川を溯る」が刻まれている。

見よ、笛吹川の溪谷は狭り合って上流の方へ見上ぐるかぎりの峭壁をなし其間に湛へる流れの紺藍の色は汲めども盡きぬ深い色をもつて上へ上へと続いて居る流れはいつまでも斯の如き峭壁にさしはさまれてゐるのだろうか

田部 重治 (Y・M)

泉久恵会員の出版記念会

去る六月二十日(水)、東京・新宿区の日本出版クラブ会館で、本会会員の泉久恵さんが上梓した『マリヤムの秘密の小箱』の出版記念会が催された。泉さんはこの会報『山』の初校の校正刷りと多種多様の原稿との照合を昨年来、持ち前の几帳面さで、忙しい執筆作業のあい間に手伝ってくれている。

今回のこの本は、泉さんが一九六八年に日本婦人西アジア親善隊員として、アララトやイストル・オナール峰などに行った際、イストル・オナール登頂メンバーとは別にアフガニスタンに入り、二年間の留学生活を終え、その体験に基いて、戦火に追われて逃避行を強いられる、現地人少女マリヤム

の悲しい物語りを子供向けに書き下したものの。

このたび日本児童文芸家協会新入賞も授賞され、そのお祝いも兼ねてというこで、多数の知人友人、本会図書委員会メンバーなどとともに、イストル・オナール登頂メンバーのうち隊長の遠藤(旧姓佐藤)京子、渡辺(旧姓渡部)節子、須田(旧姓菅谷)洋子の三氏も遠くから参加し、仲間の出版と授賞を祝った。

何人かの男性の祝辞に混り、婦人子供問題専門の女性弁護士からは、特に弱い立場の女性・子供の側からの発言があり、泉さんの知人らしい祝辞であったが、以前よりも自由にものの言える時代になった女性たちと違い、今なお続く古く長い男性社会のしきたりがあるなかで、営利業達の幻影に悩まされている、かわいそうな男性たちの社会のことも少し考えて欲しいと、出席した男性の一人として思った。

(岡澤祐吉)

マナリ国際トレッキング集会

一九九一年九月、インド・ユースホステル協会(YHAI)主催で、マナリにおいて国際トレッキング集会が開催される。

費用は一日二十ドル以内に抑え、日

本人向けには、とくに七・八日行程のトレッキングコースを開設する由。

国際山岳兵連盟について

国際山岳兵連盟(International Federation of Mountain Soldiers 略称IFMS)は、米、独、仏、伊それに日本が参加し(他にオプザバーとしてカナダ、英国が参加)、毎年一回総会を加盟各国のスキー施設のあるリゾート地等で輪番制で開催している。

日本を除く連盟参加の各国には、それぞれ、伝統と名誉を保持している山岳部隊があり、各国とも退役軍人を主体とした山岳部隊の戦友会ができており、お互いの親睦と国家間の友好親善を果している。

これに対し、日本には、旧軍隊内には、制度上の山岳部隊はなかったが、たまたま、キスカ島に進攻してきた米第十山岳師団戦友会の役員をしておられるシャーマン・スミス氏と、日本軍キスカ守備隊司令部の情報係通訳官をしておられた、春日部薫氏(中京山岳会)との交友が縁となり、アリユーシヤン列島キスカ島部隊(帯広連隊)が山岳部隊と見做され、IFMSへの参加を強く要請された。そこで、一九八六年にキスカ島部隊の関係者を主体に「日本アルパイン・スキー兵協会」(Japan

Alpine-Ski Soldiers Association 略

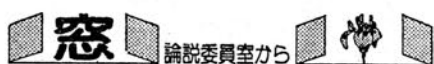
称・JASA) が組織され、藤井一美元陸将(キスカ島守備隊の参謀)が会長に推され、一九八七年にIFMSに加盟した。

一九八九年九月の米国コロラド州ヴェールにおける第四回IFMS総会には、藤井会長以下四名の代表団を送り、一九九〇年六月一日四日のドイツ、ミッテンワルト(バイエルン州)で開催された第五回総会にも阿達憲副会長

(元陸将、本会会員、会員番号四四〇七)が出席され、第二次大戦戦没者合同慰霊祭にも参列されている。(Y・M)(会員通信特集追加)

神奈川・中井修二(一〇六二七)

六月三日のウェストン祭に参加の予定で、さまざまな夢を胸にしていたがふと体調を崩し中止した。友人の細井澄子さんより前年のビデオテープの送付があり「祭の雰囲気を感じて頂けれ



窓

論説委員室から

この登山へ行こう。久しぶりにそんな気分になった。道(は)い松の緑の染みた帆布製のザックを取り出したものの、昨今の派手な山道を思い浮かべて、これでは浦島太郎の山登りだなぁと早速いそがの挨拶感を味わう。学生時代の山行には、あの赤い表紙の「山日記」(日

古い山日記

形は変わり、しかも九〇年版から休刊になっているというではないか。越にうつつなことがあった。山岳会や登山会に問い合わせると、一時は四万部も出たのが千五百部ほどに減ってしまったのだと。山の雑誌の情報はもどくなり、新年号の付録に手帳を付けたところもあるせいでは若い人々が使わなくなってきた。つまり、古い山日記は、時代の変化に取り残されてしまったわけだ。それもまたよし、なにぶん古くも歴史がある山日記のページを繰れば、一週間だけ一人会合のともなく歩き回った、黒部湖の(雲)行の足音。

右は朝日新聞一九九〇年六月二〇日(夕刊)の記事です。朝日新聞ならびに筆者徳田隆史氏のご好意により転載させていただきました。

次代に残そう美しい山と溪

ば……」との心温い配慮を得てビデオデッキで祭の全貌を聴き、とくに山田会長さんご挨拶の中の三つの「大切」標語、またチョモランマ登山隊大塚副総隊長さんのみなみならぬご苦労も知り、深い印象を得て感激しています。

(編集部宛)



図書紹介

中国・日本・ネパール一九八八年チョモランマサガルマタ

報告書編集委員会編

この三合同登山隊はタイトルどおりの『友好登山』にメインポイントをおいて考えれば大成功の部類に入る大遠征隊であり、報告書も各担当がきちり報告し、参考文献として素晴らしい内容をもっている。これだけの複雑な大組織をまとめあげ、資金を調達し、

実践に移した大変さが手にとるように理解できるし、テレビ生中継も一大事業であったことと思う。また海外登山基金を設置したことも、今後の登山界の若い人々に役立つことなので喜ばしいこともある。

第一印象はJACらしいなあーであった。JACぐらいの組織になれば大局的な立場で友好も大切だろうし、資金の裏付けとなるテレビも必要だろうしと理解できる歳になっちゃっているのだ、これはこれでいいのである。しかし、「友好」をとって登山そのものだけの見方からした最大の成果はヒマラヤ八〇〇〇峰の実践的な体験をし勉強をしたこれからの若い人々に役立ったことである。これを土台にしてどんな飛躍したらい。批判するとか、けちをつけるというくだらぬ意味ではなく、個人そのものの希望としては、今後は登山そのものの内容を一つ一つレベルアップし、国際的に通用する要素を盛りこんでもらいたいのみである。二十年前の初めてのエベレスト登山と今回のチョモランマの登山レベルをくらべた場合、作戦、人数、キャンプ、酸素、スピード……どれをとって

も変りないことに気づくはずである。現代のヒマラヤ登山の世界のレベルは八〇〇〇峰の一般ルートから酸素を吸って登るのはハイキングが常識の時代である。交差縦走が金字塔？なんていう感覚は古典になってしまふ。数年前のキャンチ縦走がハンググライダー、今回はテレビ生中継が新聞のタイトルメインにおどりでちやうとどうも登山を真剣にやってきた身にとってはやせない気になってしまふ。

個人がどうのこうのではなくて、一つの企業、一つの組織は三十年たつと衰退するので、若い血をドンドン注入し、固定された組織の古めかしい常識を改善し、平成の新しい時代の新しい活気に満ちたJACになったらいなあーと思っている。昔、JACの諸先輩たちにお世話になった身で言いたいことを言つてスイマセン！

一九九〇年五月二十日 (社) 日本山岳会刊 B5判 三五〇頁 頒価五〇〇〇円 (小西政継)

樫林 私の山旅

笠原 藤七著

著者の笠原さんは一九〇三年新潟県村松町の林業家に生まれ、長じて慶応義塾大学に学ばれた。今も元氣な山男である。本書は中学時代から七十九歳

までの記録の集大成で、全巻に著者の誠実な人柄が窺われ、まことに快い。

内容は(一)越後と会津の山二十八篇、(二)飯豊連峰と朝日連峰十五篇、(三)駒ヶ岳遍歴十八篇、(四)日本アルプスその他の山々十八篇、(五)低山低嶺八篇、(六)随筆六篇、となっている。

(一)は五剣谷岳、日本平山、栗ヶ岳ほか村松町背後の山々の記録で、村松は磐越西線からも上越線からも入った地域だから、まことに貴重な紹介だ。守門岳、毛猛山あるいは魚沼駒ヶ岳一尾瀬も目立つ。(二)の飯豊山十篇(大正九年・昭和六十年)では春の大日岳、春の杓差岳―飯豊がよい記録、また地味な三面川源流の山にも惹かれる。

駒ヶ岳という名の山遍歴(四)も面白く、(五)は南アルプス横断、九州の山、利尻岳、宮之浦岳など大紀行が並ぶ。

笠原さんの山行は実に大らかである。案内人を連れることもあるが、単独の折でも行動中に日が暮れば、あっさり夜営してしまふ。サラリーマンの山行から見れば羨ましいが、これが登山の常道でもある。本書のどの部分にもこうした悠揚迫らぬ風格が見られる。

個々に述べることは措き、著者はそれぞれに紀行に忠実な叙述をしているので、これが魅力である。また天幕でガス中毒、妊婦の登山、肥えた蝮を

急ぐから見逃した話などさりげなく挿入することも忘れない。

著者の馬力も感心の一つ。笠―槍見―焼―上高地とか湯ノ小屋―狩小屋沢―至仏―尾瀬東電小屋とか。

「昭和五十年私は胃潰瘍で胃を切った。(実は胃癌だった)。その時はまだ七十二歳で若かった。」と書く笠原さんは、七十九歳の七月単独山行で「年齢のせいで関節が固くなった私には下れない―老登山家独り山に入つて帰らず、などと」と書いているが、その九月に那須の百村山でついに単独の一夜を明かす。ホテル滞在だったので翌朝騒ぎの中に下山。この『樫林』一卷は「恐惶謹言」の謝辞で終っている。まことに嬉しい味付けである。笠原さんは林業家だけあって、樹木の種類や草花、林相などに目をとめておられるのも付加えておきたい。即ち書名は『樫林』。

巻頭に著者のスケッチ、西山英雄画「雪山の雷鳥」各一葉と写真十四葉がある。写真には村尾金二、深田久弥、藤島敏男、本郷常幸、早川義郎諸氏の姿もあり、貴重な資料でもある。編集は望月達夫さんと横山厚夫さんのコンビで何年がかりというお骨折だったが、さすがはお二人の技術で、A5判、五百二十一頁で、梨地と濃紺布装の表紙、特製函入という内容充実の豪華本

が世に出た。著者へと共に敬意を表したい。

平成二年四月発行 発売茗溪堂 頒価 四〇〇〇円 (川崎精雄)

(付記) 本書「あとがき」のなかで笠原さんらの昭和十七年三月の大日岳(飯豊)を積雪期初登頂と書いたのは正しくない。大日岳は昭和二年四月二日弥平四郎から慶大山岳部本郷常幸氏らによって積雪期初登頂がなされているからである。ただし三月に長者原から石コロビ沢經由で登頂したのは笠原さんらが初めてであろう。貴重な紙面を借りて訂正します。(望月達夫)

Das grosse Clubhüttenbuch

Die Hütten des Schweizer Alpen-Clubs

スイス山岳会所属の山小屋の紹介解説した写真集 Clubhütten-Album des SAC の初版が刊行されたのは一九一年のこと、七十ヶ所の山小屋が紹介されていた。その後、一九三一年の再版では一二四の山小屋の写真が掲載されていた。写真はモノクロだったが、しぶい、落着いた本であったように記憶している。

その後、一九七〇年になって、文庫本形式の小型で実用的なものが刊行さ

れた。カバーには昔の石造りのいかに

もがっちりした山小屋から超現代的な建築のビバーク小屋まで、二一ヶ所の小屋がカラー写真で紹介され、本文中の写真はすべてモノクロだが、SACの一〇七支部がスイス全土に所有する二二三ヶ所の小屋（スイス山岳会は現在会員数約七五〇〇名だから、JACとは一ヶタ違いだが、それにしても二〇〇以上の山小屋を所有しているのは羨しいかぎりだ。なおヨーロッパのアルペン諸国の各山岳会の会員数、所有山小屋の数はスイスと大差ない）が紹介されている。アイガーのミッテルレギー小屋のようにガイド組合が所有している小屋や個人経営の小屋（わが国にくらべてぐっと少ない）は掲載されていない。

記述は簡略だが、所属支部、標高、地図ナンバー、小屋番の有無と小屋番のいる期間、小屋までのふもとと村からのアクセス、小屋からの主要な目標が記されていて大変便利なので、わたしも愛用愛読している。

今回、スイス山岳会創立一二五周年（一九八八年）を記念して新しく刊行された写真集は、全頁がカラーのタイトル通りの大型豪華本で、SAC本部に所属する一五四ヶ所の山小屋とビバーク小屋、それに Akademischen Alpen Clubs 所有の八ヶ所の山小屋が紹介さ

れている。

各頁にひとつの山小屋の写真、それに二五万分の一の地図から作成したふもとの村からのアクセスの図版、巻末にまとめて各小屋の建設年と増築年、収容人員、小屋番の滞在期間、ふもとの村からのアクセスと所要時間、小屋からの主要登攀目標、他の小屋への連絡コースなどが独、仏、伊、三ヶ国語で記されている。

なによりも嬉しいのは、どの小屋の写真も、その小屋がどのような山々に囲まれた環境内に建っているのかがよく分るような写真が採用されていることだ。私はこれまでこの写真集に出ている二二ヶ所の小屋に泊って、スイス・アルプスの三十余峰に登頂する幸運に恵まれた。この写真集を眺めていると、過ぎし日の楽しかった山行のひとつひとつがなつかしく思い出されてくるし、まだ訪れていない小屋の写真を眺めていると、新しい夢が湧いてくる。なんと楽しい写真集なのだろう。

一九八八年 スイス山岳会 *Ue* 支部刊 二四〇頁 (近藤 等)

Mountaineering

in India

by Capt. M.S. Kohli

故ネール首相はヒマラヤについて、

「私たちに親しいばかりでなく、非常に大切なものであり、そのために常に

私たちの歴史や伝統・思考・詩・崇拜・信仰の一部を担ってきた。神話によれば、ヒマラヤは『神々の座』なのである。」と語っている。インド人とヒマラヤの関係は五〇〇年前のヴェーダに遡ることができる。十九世紀には諸外国人による、ヒマラヤ遠征が行われるようになったが、インド人のスポーツとしての登山は、イギリス人登山家の率いるドーンスクールの学生が、一九四二年、パドリナート近辺のアルワ谷の五九九三に到達したのに続き、一九五一年七一二〇のトリスルに登頂したのに始まる。そしてテンジンのエベレストの後から、登山学校・IMF (インド登山財団) の設立と登山活動の基盤が固められ、インド人によるエベレストへの準備が進められる。二回のエベレスト遠征、数々のトレーニングをへて、ようやく一九六五年五月、本書の著者M・S・コリー氏の隊が、十日間にわたって九名を登頂させることができた。この一国で九名という記録は、その後十七年間破られなかった。

女性の活躍もめざましく、一九五九年のチョーオユーに始まって、トリスル、カメット、ナンダ・デヴィと続き、一九八四年には混成パーティでエベレスト登頂に到っている。またさまざま

な国との合同登山を行っており、近年は日本とが最も多い。JACともカイルス、カメット、ナンダ・デヴィで合同登山を行い、また一九八一年には、ミーナ、チャンドラ、ラマの三人を穂高、剣に招待したことも記憶に新しい。

本書は近代登山以前から現在に到るインド登山史であるが、自然保護、生態学にも触れ、ヒマラヤをとくに愛したネールとインディラ・ガンジーの一章も設けている。付録に許可される山名リスト、外国登山者規定、申請書様式、登山モラルなどが加えられ、インドおよびインド登山に関心のある方に、一読をお勧めしたい。

一九八九年 *Nakas* 刊 二五四頁 (麻生由紀子)

報告

第二一回

『山岳図書を語る夕べ』

図書委員会主催

ペレストロイカの進展とともに、ほんの数年前までは固く閉ざされていたソ連領内各地が、どんどん外国人に開放されています。四月二十日、本会ルームで催された「夕べ」のテーマ『ロシアの探検と山の本』の講師、田村俊介さんは、この動きの日本側の強力な推進者でもあります。参加者は三八名、田村さんの「講演」の中身の面白さは

もとより、関心の深さを反映してか、後半はパネルディスカッションを思わせる、活発な質疑応答と情報交換の場になりました。

「講演」は二部に分かれます。第一部は革命以前の、帝政ロシアの領土拡大と表裏一体となった探検史。これにはシベリア、中央アジア、モンゴル、チベット、北極海、世界一周航海など諸方面がありますが、ここではセミョーノフにはじまる中央アジア探検が話の中心になりました。

セヴェルツェフ、ポターニン、そして、あのブルジェヴァルスキー、さらにはフェドチェンコ、ロボフスキー、コズロフ、レーリヒと、名前を聞いただけで胸のおどる探検家たちの業績が、それに関する本人の著書や後代の著述を紹介しながら語られます。ソ連では国外搬出を禁止されている貴重な原書の数点がその席で回覧され、本好きにはたまらない「夕べ」になりました。シルクロードといえは天山北路と南路が知られているけれど、天山山脈のまんなかの山間を縫った素晴らしい道があり、「私も去年そこへ行ってきた」などという田村さんの話も、参会者の旅心をいたく刺激します。

第二部は革命後の、ソヴェト社会主義共和国連邦になってようやくロシアに確立した近代アルピニズムの歴史と

現状。あの国らしく国家主導型の、アラバコフ兄弟や大粛清で殺されたクリレンコなどが登場するスポーツ登山思想の変遷の話も面白かったけれど、なんととっても興味深いのは、省庁と同格の体育スポーツ委員会傘下のアルピニズム連盟が管轄するソ連登山界の現状です。

登山者の資格が等級化され、それには厳密に細分化された基準があり、最高レベルの登山家になると日本とは比べものにならぬ、どうも次元がちがう超人ぞろいだという田村さんの体験的な驚嘆まじりのリポートは、列席の中高年会員よりも、この種の集いを敬遠する現役の若い会員の方が耳をそばだてるべき話でしょう。等級の重要な基準となる、ソ連の全山城を網羅した『ソ連邦の山岳ルート難易度表』という、アルピニズム連盟が今年発行したばかりの本も回覧されました。

というわけで、今回の「夕べ」は講師の田村さんの目配りの行き届いた「講演」のおかげで、歴史回顧派にも現状挑戦派にも、トレッキング族にも登山族にも、聞きのがせない話でいっぱいになりました。そのあとの饗宴^{シラビソ}がとても楽しかったことは、言うまでもありません。

(平井吉夫)

富士山の自然観察山行

—平成二年六月

十七日(日) —

自然保護委員会

連日の雨に気をもまれたが、当日は朝から雲一つない快晴となった。新宿七時半集合、参加者二十四名を乗せたバスは快調に中央高速道を走り、スバルラインに入る。今日の講師は田村説三会員、標高八五〇mのこのあたりは本来ならブナが生える所だが、剣丸尾溶岩流の上に当り、土壌的に厳しいので赤松林となっている、という説明があった。両側とも見事な赤松林が続いているが、道路を切り開いたため、林縁にはニシキウツギその他のマント群落^{マント}が理論どおりよく発達している。標高一四〇〇mの合目付近からシラカバなどの広葉樹林帯に移り、二合目を過ぎるあたりからシラビソ帯となる。標高が高くなるにつれ、道路を作ったことによる林の崩壊が目につく。環境が厳しくなるとマント群落が成長せず、林縁から次々とコマツガなどが倒れてゆき、無惨な有様を呈している。十時、標高二三〇〇mの五合目着、雪の光る南アルプス、八ヶ岳、奥秩父、御坂山塊、本栖湖、精進湖、河口湖など梅雨の晴間の素晴らしい展望であ

る。全員集まって自己紹介の後、シラビソ、シャクナゲなどの茂るしつとりとした道を御庭に向う。凹地には未だ大きな雪渓も残っていて、ダケカンバやカラマツの新緑がまぶしく輝いている。「凹地は水分が多いので森林限界が上に上っている。」「土壌が形成されて林ができると、その下にコケモモの大群落が発達する。」など、実地をみながらの説明でよく納得される。林の開けた御庭付近まで来ると、赤っぽい火山荒原がひろがり、その上に雪の帯の残る富士山頂が仰がれた。青空に白雲が流れ、みな写真をとったりしながら肌の汗ばむ快いハイキングとなった。十一時半御庭で昼食。ここから奥庭にかけては風雪に耐えて曲りくねった天然カラマツが沢山見られる。地衣類をルーペで見たり、青木ヶ原や寄生火山の植物についての説明を伺いながら降る。奥庭の遊歩道から眺める富士山はなかなか立派だ。富士山を背景に記念写真をとる、原生林の中を降る。「陰樹であるコマツガは、暗い林内で細々と生きつづけ、親木が倒れて陽がさし込むと一気に成長する。」「倒木の上は幼樹が育つのに条件がよいので一列に並んで木が生える。」など実例を見ながら解説が続く。深い森の中に、ツバメオモトやイチヨウランがひっそりと咲いていた。メボソの明かるいさえずりが

ひびく中を三合目に降り、待っていたバスに乗り込む。十五時半発、少し早目に現地を出たので高速道路の渋滞もなく、十八時過ぎに新宿に着いた。

〔参加者〕 田村説三、賀嶋増造、細川俊彦、長嶋正浩、楠田トシ子、楠田育成、赤松光、阿部一孝、小沢みち子、星野信男、兼岩良保、黒岩京子、西山俊恵、長谷川寛、長谷川房子、西郡明、沢井陽子、中村純二、遠藤光男、木名瀬亘、沢井政信、関塚貞亨、市川義輝、中村あや (中村あや)

越後支部親睦登山会

海谷山塊・駒ヶ岳

(一四八七メートル)

副支部長 上村幹雄

ここ数年、支部では支部親睦登山会県外の日本山岳会の皆さまはじめ、広く仲間も加えて越後の魅力ある山々を紹介しながら、楽しい山旅の集いを実施して参りました。(S・六二年苗場山、S・六三年巻機山と清水峠、平成元年末丈岳) 毎年、参加者多く、六〇一〇〇名を越す盛況は新しいコース紹介があったり、行きたいと思いつつも、なかなかチャンスのない名山周辺の中級山岳を会場としているせいもありましようが、一年に一度の七夕のように遠方九州から大阪から関東からと

〔自然保護随想〕

奥秩父・富士・尾瀬をめぐる問題

今でこそ大自然の環境を保全することに意義を認めない人は少いと思うが、これも時代的な変遷があると思うので私見を述べてみたい。

わが国において山は神の住む所であり、山自体さらには古代からあった。仏教も山岳に根ざした宗教であり、最も伝統的な文化と言われる日本庭園の造作を見れば理解できよう。さらに北山杉や木曾桧の姿は経済的要求に応えた植林であるが、人工とは言え、自然環境に適合した文化的美しさを保っている。

この歴史的な調和を壊したのが相継ぐ戦争であり、戦後の高度成長の余波であった。わが国でも最も美しいと言われた奥秩父荒川源流の将監峠から和名倉山の原生林は無残に乱伐され、あぶくの果に連峰スカイラインなる構想が生まれ、それに反対する運動が具体的な自然保護運動のきっかけを作ったと覚えている。すでに、富士

スバルラインによる大規模な動植物の生態変化が心配されていた折でもあったが、当時面談した大石長官も結局は建設にかかわる利権がこの種の問題の根本にあることを嘆いておられた。

尾瀬の問題は戦後の経済復興における「水力発電か高山植物か」という論争に見られるように、日本の自然保護の中心的存在と考えられ、現在では入山料や風呂の問題が新聞をにぎわしているが、結局は、これは自動車公害の一つであって、尾瀬をめぐる最高地点の峠まで乗用車・観光バスを入れたために生じた現象で、「登るべき尾瀬が下る尾瀬」になったがための現象と思う。営業用の車はともかく、われわれは峠を越えて尾瀬沼・尾瀬ヶ原をはじめて見たときの感激を大切にしたい。なお、入山料については、有料道路にしても、自動車数が減らないのが現状で、解決策になりそうもないし、まして歩行者から通行料をとるのは例がなく、比叡山では境内を通過する東海道自然遊歩道のハイカーからは入山料をとっていないことを併せ考えると、山は自由に歩きたいものである。

(木名瀬 亘)

知己の仲間、新しい仲間と集って半数以上を県外の方々に占める広範囲懇親山行の感を呈しておりますことは支部としましてたいへん感謝と喜びを感じます。

報告紀行

六月十六日夕刻十六時、雨。糸魚川の外れの高台にある「パークイン美山」に続々と参加者集合。マイクロで名勝親不知へと向かう。ここには昭和六二

年から彫刻家茂木弘行氏の製作になる全身像のウエストンの岩に座して遙く北アルプスを仰望するブロンズ像がある。上高地のウエストン祭は全国に有名であるが、地元、会員の小野健氏によれば、上高地のウエストン祭を山のウエストン祭とすれば、親不知のウエストン祭は海のウエストン祭として毎年糸魚川市を中心に盛大に举行しているという。謂はウエストンが明治二

七年七月白馬岳に登るに際し、北アルプスの海に落ち込む果てを先ず見極めんと、ここに訪れて登ったことに因んでいる。「砥如矢如」大絶壁の下、穏やかな波枕を寄せて日本海は雨に煙っていた。

パークイン美山に戻って食堂に会す。青海電化の専門家、小野健氏(鉱物学博士)のフォッサマグナの講話は短時間に我々素人も億万年の世界へと

引込まれて後、海幸溢れる肴を前に山を語り懐旧にそれぞれを満たす懇親会であった。

翌十七日、前夜のアサヒビールの飲み干しあつてか、旭射す晴れが約束される朝を迎える幸運に恵まれ、心配も霧と消える。伝説には山の胴に義経が乗捨てた駒の形の岩があるというが、切り立つ岩頭が山麓を分つて台状に空を切る山容は、将棋の駒である。鎖や鉄梯子、ロープも手繰る急登りと、下りも岩棚をすがり降りる急下降路もある山道はこの大集団であるから雨だつたらたいへんだつた。海川側、御前山コースで入り、標高七八〇までのマ

イクロパスは地元のご好意。海川第一発電所上の緑の台地に建つログハウス前で記念撮影。そそり立つ駒ヶ岳の岩壁は爽風を抜う。郭公鳴き交わす緑樹を抜け、左に岩肌を見つ、一足一足と高度は高まる。台状に変わった稜線直下は、がらりと風貌を変えた原生のぶな林。そこで嘆声の上がる美事さ。雪解の水流れるほとり水芭蕉、タムシバ、ヤシオツツジ。稜線に出れば可憐な岩鏡が鮮紅に花咲いていた。山頂はそこすぐであった。雲立上げて雨飾山、そして焼、火打と頸城アルプス。西方、残雪豊かに、なお高く白馬岳、朝日、乗鞍、雪倉と北アルプスも仰望。狭い山頂は今日ひと日、日本山岳会のメン

バーで一杯だ。途中で拾ってきた雪塊で冷やした缶ビールが喉を心地よくぬけてお腹へ。一時間半のゆったり山頂滞在は疲れも消え、山頂での億万年昔の講話十分はタイムトンネル。知性学識豊かな一層山の魅力を引立ててくれるのも日本山岳会ならではと誇りにも思った。無事、根知川のほとり山寺に全員下山。全て予定通りは会員みんなの協力と精進と感謝。またお会いしましょう。

△即興みじか歌▽
原生のぶなに斑ら陽きら揺れてマグマの噴ける駒峰晴れ立つ
〔参加者〕

(県外より) 本間兌二、大塚玲子、中西豊和、川合愛子、須藤節子、原田敬子、高橋清治、久世明子、木内静子、入谷浩右、里見清子、中保、斉藤敏男、川中久、穴田雪江、橋本雅子、横溝修一、大野盛彦、柳下棟生、井関扶、久保三朗、柿花道子、斉藤かつら、山口悠紀子、小倉厚、石間信夫、砂田定夫、吉村健児、佐野かよ子、梅野淑子、妹尾幸男・律子、内山城 三十三名(県内より) 岩下光男・香代子、西山洋一、矢尾板二郎・奈々子、山田一男、山田智子、寺門稚子、藤田朋子、早川英夫、山崎幸和、上野寿一・栄子、佐藤一栄、本望英紀、佐藤徳松、山田勲、田中純夫、坂井厚、山田政石、上村幹

雄、戸貝純夫、荒井辰弥、遁所彊二、矢田前、高辻謙輔、小野健、筑木力 二十八名

ほか、さわがに山岳会、労山の会など協力者 八名 合計 六十九名
△記録▽ 美山荘発六時四十分〇〇グハウス七時三十分〇〇五分〇〇雪溪八時五分〇〇鉄梯子八時十分〇〇休憩八時三十分〇〇四十分〇〇二本杉九時五十分〇〇水場九時五十分〇〇十時五十分〇〇山頂十分〇〇三十分〇〇十二時〇〇見晴十二時三十分〇〇通過〇〇岩棚終る十二時四十分〇〇一〇五〇〇〇水場十三時〇〇休憩十三時四十分〇〇十四時〇〇林道車道に出る十四時三十分〇〇根知川の橋で終了十五時
(遁所彊二)

マカルー、チョーオユー 報告会

梅雨空にもかかわらず、橋本評議員、宮下学生部指導委員長をはじめ、六十七数名の若い会員が集まり、熱気にあふれる集会が行われた。

まず学習院加藤洋氏のチョーオユーにつづいて明治大西宏氏によるマカルー速攻登山の報告があった。

学習院隊ではガモウバッグ(携帯加圧室?)の使用、マカルー隊はポラード女流登山家ワンダとの確執など、たいへん有意義な話に活発な質疑がな

された。

引き続きこの夏バミールへ出かける大谷亮隊長以下、青年部・高所登山委員会共催のパミール国際キャンプ遠征隊の壮行会を実施。夏山シーズン前にビールで乾杯、盛会のうちに終了した。六月二十八日(木)本会集会室。
(青年部 絹川祥夫)

会務報告

六月理事会

日時 六月十四日十八時四十分
場所 本会会議室

出席者 山田会長、村木、藤平両副会長、松田、西村、重広、山本、織田沢、早坂、小林、入沢、穴田、小倉、関口、松本、伊丹、石橋、神崎、藤井の各理事、飯野監事、平林、大島、橋本の各常任評議員

委任出席 藤本理事、太田監事、小倉、鳴原の両常任評議員
議事

◎平成二年度理事会運営方針(山田)

組織と規定の見直しについては、本年度こそ実施したい。自然保護、遭対、海外等については、日山協、労山、H A J 等と委員会同志の交流をはかるように考えたいとの前置きの後、委員会別に要望事項がのべられた。石岡氏からの要望書については、今後ともお互

- いに接点を求めて話し合いを続けていくつもりであるが、本日お配りした理事・評議員にあてた石岡氏からの資料については、内容をよく読んで、ナイロンザイル事件の本質を勉強して欲しい旨の説明があった。
- 審議・承認事項
- (1)新支部長承認の件
この度、届け出のあった(北海道)小須田義夫、(東海)湯浅道男、(山陰)吉川暢一、(東九州)梅木秀徳の各支部長を承認した。
- (2)新役員任務分担の件
神崎理事は海外担当とし、藤本理事と復教体制で担当することにする。
- (3)海外登山推薦状発行の件
東京農大一九九一年ブロード・ピーク登山隊を承認。
- (4)「オーロラの下で」招待券受理の件
テレビ朝日から申越のあった招待券九千枚寄贈の件は、有難く受理することにする。
- 報告事項
- (1)HATの件(神崎)
ヒマラヤン・アドヴェンチュア・トラストについての集りを六月六日に行い、基本方針、会則、組織等について検討した。
- (2)マッキンリー気象観測隊推薦の件
(3)国土地理院マップモニターの件
(4)海外関係情報(シャモニー、アンナプルナ登頂四〇周年祭他)
- (5)山岳遭難救助用無線の件(藤平)
(6)タンボチエ募金の件(伊丹)
(7)故西堀栄三郎氏追悼会の件(山田)
- 委員会報告
- (1)高所登山(重慶)
シツシャパンマには斉藤60、中島59両ドクターが登頂した。その他マッキンリー、ナムチェバルワ等の情報についての報告があった。
- (2)学生部・青年部(早坂)
六月二・三日、谷川岳合宿。パミール隊は七月九日、十二日に出発の予定。六月二十八日マカルー(原真氏の国際隊)、チョーオユー隊(学習院)の報告会をかね壮行会を行う予定。
- (3)集会(入澤)
六月九・一〇日、第十回若葉会山行を宮城支部の協力のもと禿岳で実施。四十六名参加。
- (4)山研(石橋)
環境庁に提出する申請書の原稿を作成中。
- (5)指導(小林)
十月二十・二十一日、小川山で岩登りの講習会を計画。
- (6)総勢(藤井)
シャープより大型ビデオプロジェクト(液晶ビジョン)を購入した。
- (7)婦懇(穴田)
五月二十日、本社ヶ丸山行十名参加。

フィルム委員会保管リスト(追加分)

録音テープ(カセットテープ)保管リスト

日本山岳会フィルム委員会

No.	面	題 名	時 間	録音年月日	講演者・演奏者等	寄 贈 者	備 考
		日本山岳会有志懇談会		1965. 6. 9	司会 山下一夫	今井喜美子	於 六義園
		第 43 回ウエストン祭		1989. 6. 4	大塚博美他	JAC 信濃支部	

ビデオテープ(VHS・β)保管リスト

日本山岳会フィルム委員会

No.	題 名	種類	時 間	制 作 者	制作年	寄贈者	備 考
21	アフリカ横断1万キロ (早大赤道アフリカ遠征隊)	VHS	90分	日本映画社 堀場伸也撮影 林田重男		関根吉郎 小倉薫子	東宝映画
22	エピック オブ エベレスト (1924)	VHS	17分		1990.2		サイレント白黒 8ミリ映画より
23	ナンダコット征服 (1936)	VHS	28分	毎日映画社	1990.3		立教大学山岳部 サイレント白黒 16ミリ映画より
24	黒部の秋 (1929)	VHS	30分	別宮貞俊	1990.4	別宮貞俊	サイレント白黒 16ミリ映画より
25	スキーツアー (1929~30)	VHS	12分	別宮貞俊	1990.4	別宮貞俊	"
26	冬のロータン峠 (1930~1) パンジャブ・ヒマラヤ	VHS	20分	三田幸夫他	1990.4	三田幸夫	"

映画フィルム(16 ミリ)保管リスト

日本山岳会フィルム委員会

No.	題 名	種類	音 声	時 間	長さ ft	制作者	制作年	寄贈者	備 考
71	Epic of Mt. Everest	白黒	サイレント	10分			1924	三田幸夫	ビデオ有

七月七日、遠藤京子会員を講師として講演会を行う。

(8) フィルム・資料(織田沢)

「地図で見る日本の山岳展」に協力した。六月二十二日、大型テレビの鑑賞会を行う。

(9) 科学・医療(関口)

雨具のシンポジウムは十一月に変更。来年一月には、「疲労」についてのシンポジウムを開催する予定。第十回登山医学シンポジウムは予定通り七月十四・十五日、アルカディオ市ケ谷で開催する。

(10) 財務(西村)

委員会予算の執行についての要望事項につき説明があった。

(11) 自然保護(松本)

三国山系の稲包山一帯の大規模リゾート開発、南会津の田代山スキー場開発計画は問題がある旨の情報提供あり、目下調査中。六月十七日の富士山自然観察山行には二十七名が参加した。九月十六・十七日。全国集會を静岡支部の協力を得て三島で行う予定。
●本日の入会承認者 武藤光明氏他二十三名

・ルーム日誌

(6月)

4日 総務委員会
5日 婦人懇談会

6日 青年部、HAT準備会議

11日 図書委員会

12日 山研委員会

14日 理事会

15日 自然保護委員会

16日 ウェストン年譜打ち合わせ

18日 総務委員会

19日 資料委員会

20日 三水会

22日 フィルム委員会ビデオ映写会

23日 防衛庁OB山岳会使用

25日 フィルム委員会

26日 自然保護委員会

27日 集會委員会写真交換会

28日 青年部、学生部報告会チヨオユ、マカル、パミール壮行会

29日 科学委員会講演会

6月来室者45名

会員異動 6月

終身会員へ

栗原敏起(六八二七)

高島真一(三七二九)

馬場 猛(四九四三)

姓名変更

大津弥生(九八六五)→田代弥生

澤木由美子(九五五〇)→宮野由美子

尾崎陽子(九八三〇)→三原陽子

日高葉子(一〇二八二)→坂本葉子

青木 光(六二五三)→柳澤 光

退会

沖永 裕(八八七四)

タンボチエ僧院再建協力

募金者ご芳名

一万円—宮川良雄、秀島敏、島尾久子。五千円—松野賢珠、久我良房。

七月五日現在累計二七五名、累計金額二、七三二、〇〇〇円

募金振込先

銀行 協和銀行市ヶ谷支店 普通預金 口座番号 三六五四六六

郵便局 東京七三〇六〇一

口座名 タンボチエ僧院再建協力会



この電話でもお知らせしています

●第七回国際低酸素症

シンポジウムのお知らせ

表記のシンポジウムについて、昨年六月の本誌五二八号に記事として予告しておきましたが、このほど下記の要領で開催されることに決まりましたのでお知らせ致します。

『低酸素症』といっても実態は高所医学のシンポジウムです。先日登頂に成功した京都大学シシヤパンマ峰医学学術登山隊の成績もかなりここで発表

される筈です。なかなかユニークなシンポジウムですので、多数ご参加なさるよう、お勧めします。

記

会期 一九九一年二月二六日より三月二日まで

会場 ホテル、シャトウ・レイク・ルーズ

参加費 十一月一日以前に払込み 米\$三〇〇、十一月一日以後に払込み 米\$三七五

学生は半額。但し要手続き。

宿泊費 一室一人使用の場合 米\$一七、一室二人使用の場合 米\$八八、いずれも一泊三食付。

演題申込締切 一九九〇年十一月一日

参加申込用紙請求先 参加、宿泊、演題申込には一定の用紙があります。左記に直接請求してください。

Ms. Ingrid Ellis

Conference Coordinator IM10

McMaster University,

1200 Main Street West

Hamilton, Ontario, CANADA.

L8N 3Z5

お問合せは中島迄お電話で。

大阪府済生会泉尾病院

〇六一五五二—〇〇九一(代)

(中島道郎)

図書受入報告

図書委員会

平成2年6月受入図書

1. 自然保護年鑑刊行会編「自然保護年鑑 2」同刊行会 平成1 (発行者寄贈)
2. 樋口敬二他編「日本最古の化石氷体の構造と形成に関する研究」名大水園研 平成2 (発行者寄贈)
3. 日本環境協会編「第2回太平洋環境会議報告書」同協会 1990 (発行者寄贈)
4. 教科書研究センター編「教科書図書館蔵書目録」同センター 1990 (発行者寄贈)
5. 三国友好登山隊編「中国・日本・ネパール チョモランマ/サガルマタ友好登山隊報告書」日本山岳会 1990 (編者寄贈)
6. 川森圓次郎編「高きを志して」川森圓次郎 平成2 (発行者寄贈)
7. 安本敏雄編「守れ山のルール ハッ岳 遭難訴訟原告を支援した岳人たちの記録」安本敏雄 1988 (木下是雄氏寄贈)
8. 金沢大医学部山岳部「木馬道—水腰英隆追悼号 1989 (正橋剛二氏寄贈)
9. 小倉董子著「女の山歩き山登り」山と溪谷社 1990 (著者寄贈)
10. 柳原修一著「北アルプス山小屋物語」東京新聞出版局 平成2 (発行者寄贈)
11. 笠原藤七著「樺林 私の山旅」茗溪堂 平成2 (著者寄贈)

12. 高力平太郎著「みなかみ」同刊行委員会 平成1 (著者寄贈)
13. 慶応大学アルペンフェライン編「Khumbu Himal Mera Peak 報告書 1990」同登山隊 1990 (著者寄贈)
14. 福井正身著「南伊勢の山 30 山」福井正身 1990 (著者寄贈)
15. 根深誠著「チベットから来た男」岩波書店 1990 (発行者寄贈)
16. 高瀬保編「越中立山古記録 第二巻」立山開発鉄道 平成2 (発行者寄贈)
17. 連編「環境共者ボランティア虎ノ巻」連 1989 (発行者寄贈)
18. 東北山岳写真集「東北百名山」山と溪谷社 1990 (発行者寄贈)
19. マッキンリー遭難対策本部編「マッキンリー山山隊極北の烈風に死す」東京新聞出版局 1990 (編者寄贈)
20. 加藤達三郎著「山と風と」加藤達三郎 平成2 (発行者寄贈)
21. 北大山岳部編「北大山岳部々報 13」北大山岳部 (発行者寄贈)
22. エーデルワイスクラブ編「エーデルワイス・クラブ 35 年のあゆみ」エーデルワイスクラブ 1990 (発行者寄贈)
23. 西浦左門著「山村の十二ヵ月」エンタープライズ 1990 (発行者寄贈)
24. 岩稜会編「ナイロンザイル事件報告書」岩稜会 昭 52 (石岡繁雄氏寄贈)
25. Mansfield Centered "Covering the Pacific Environment" Mansfield Center 1989 (日本環境協会寄贈)

…お知らせ…

昨年行われた第一回『登山用雨衣シンポジウム』の報告書ができました。全二〇頁 頒価五〇〇円に送料一七五円を添えて日本山岳会科学研究所委員会までお申込み下さい。

概要 防水・透湿性の雨具はよい材料であるが、使用者側からいろいろ問題が指摘された。濡れてくる場合や、ムレ、耐久性などである。濡れは逆透湿現象で説明される場合が明らかにされた。寒冷季には外衣内側に結霜の問題等もあり、快適性とサバイバル性の不一致が重要な問題として論じられている。

…科学研究委員会

◎自然保護全国集会

九月十五日(土)～十六日(日)

静岡県三島で開催

今年の自然保護全国集会は、静岡支部のご協力を得て、静岡県三島にて二日間におたつて行ないます。第一日目のテーマは「ナショナルトラスト運動の成果と地域住民主導による自然保護」で現地視察として、21世紀に残したい日本の自然一〇〇選に選ばれた柿田川湧水群と、樹齢七百年のブナの大木をはじめ貴重な植物が自生する函南原生林ハイクを企画しました。二日目は「登山者ができる自然保護」というテーマで話し合いたいと思います。

集合 九月十五日(土)

東海道線 三島駅北口 午前十時三十分 貸切バスに乗り

現地視察、夕食後は懇親会、キャンブファイヤーを予定しています。

九月十六日(日)

◎早朝散策

◎九時から集会

一、各支部の状況報告

二、自由討論「登山者ができる自然保護」

三、昼食後、十四時現地解散

会場および宿泊先 静岡県三島市立「箱根の里」

会費 一万円(一泊四食、懇親会費、

バス代、記念品代)

申し込み

宿泊予約のため一般、支部会員とも九月五日(水)までにハガキで事務局へ

自然保護に関心のある一般会員の参加をお待ちします。 自然保護委員会

◎テレホンサービスのお知らせ

機械の故障のため、長い間ご迷惑をおかけしましたが、新しい電話を入れましたのでご利用下さい。

なお、情報を入れた方は事務局または総務までご連絡下さい。

◎会員懇談会のお知らせ

期日 十月五日(土) 午後六時三十分

場所 本会集会室

(総務委員会)

◎磐司岩講演会と探索山行

今年度の探索山行は蔵王山塊磐司岩の地形や民俗学をテーマに、二口温泉にかけ、磐司岩の生い立ちやマタギに関する話を講師から伺った後、翌日は講師と共に紅葉の裏磐司岩や大東岳に遊びたいと考えています。奮ってご参加下さい。

◎講演会と探索山行

集合 平成二年十月二十日(土) 午後五時二口温泉磐司山荘(仙台駅発

⑧宮城交通バス乗場、二口温泉
行十五時四十分発が便利です

講演 午後五時半～六時半

講師 宮城県自然保護課研究員

動崎 徹氏

演題 磐司岩の人と自然

―地学、民俗学、登山史―

懇親会 午後七時半より磐司山荘

宿泊 磐司山荘

探索山行 十月二十一日(日)

八時山荘発、A班大東岳、裏磐

司岩 B班裏磐司岩、梯子瀧、

時間のある人は二口温泉で入湯

仙台行バスは十四時五十分。十

六時四十分の予定

参加費 一泊三食、保険料等 会員一

万円、非会員五百円増。現地

徴収

申込 会員番号、氏名、年齢を記して平

成二年九月末日までに日本山岳

会科学研究委員会宛ハガキで。

注 探索山行の詳細については、後

刻、参加申込者に連絡します。

科学研究委員会

◎全国支部懇談会山形集会

『90蔵王の集い』のお知らせ

毎年行なわれております全国支部懇
談会を、今年は創立四十周年を迎える
山形支部のご協力により、蔵王で行う
ことになりました。秋の蔵王の自然の

中で有意義な会にしたいと思いますの
でふるってご参加下さい。

記

日時 平成二年十月十三日(土)～十四

日(日)まで

場所 山形市蔵王温泉横倉ゲレンデ

TEL〇二三六―九四九六〇三

「蔵王アストリアホテル」

日程 受付午前十時～午後五時まで

午後一時より全国支部事務局担

当者会議、午後三時より「やま

がたよもやま話」「蔵王の自然」

の講演、午後六時より全国支部

懇談会。

十四日(日)蔵王・地藏山登山

Aコース五時間、Bコース三時

間半

会費 一八〇〇円(宿泊、懇談会、

記念品、風呂、ロープウェイ、

弁当、乾杯用ビール)

申込み 九月三十日(土)まで

申込先 990山形市肴町一―一三山形城

北女子高等学校内 菊地俊彦気

付 日本山岳会山形支部全国集

会事務局宛

TEL〇二三六―四六―三三七七

送金方法 山形銀行宮町支店

「日本山岳会山形支部全国集会」

普通預金〇五四〇六二五

日本山岳会総務委員会

支部担当 中川 武

◎ビアパーティー

期日 九月一日(土)

場所 日本山岳会集會室

会費 二〇〇〇円

にぎやかに、夏山の話も肴にして、飲み語りましょう。
婦人懇談会

訂正と追加 十二月号(五三四号)

七頁四段短歌二首目「…山ありてこそ楽しさを…」↓「…山ありてこそ楽しさを…」に訂正。

六月号(五四〇号)一八頁、新入会員上から七人目、

藤田浩樹(一)↓藤田浩樹(二)

七月号(五四一号)一九頁、同上から六人目、

藤田浩(一)↓藤田浩(二)にそれぞれ追加します。

平成二年八月二十日

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京(廻)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一―スビル

印刷所 株式会社技報堂